

# 他動詞的な「させる」文について

—書き言葉で必要な「させる」文とは—

江<sup>ごう</sup> 田<sup>だ</sup> すみれ

## 1. はじめに

江田(2008b)は、「させる」文について、科学的入門書では被使役者の自発性・意志が読み取れない例が多く見られると述べた。本稿ではこれを「させる」文の他動詞的用法と名づけ、その分布状況、用法上の特質などを概観し、外国人学習者への教育に役立てたいと希望するものである。

## 2. 先行研究

使役と他動詞との関係については多くの研究がなされている。

なお、本稿全体としてはいわゆる使役より広い意味の表現を扱うので「させる」文という用語を使い<sup>1)</sup>、いわゆる使役者をX、被使役者をYと表記するが、先行研究について述べる時は研究者の用語をそのまま用い、使役・使役者・被使役者などとする。

青木(1977)は使役を「ある者が他者に対して他者自らの意志において或いは主体性をもってその動作を行うようにしむけること」と定義した。行為者に意志あるいは主体性があることが必要だが、同時に、被使役者は有情物だけとは限らないと説明している。

井上(1976)は、使役文の目的語は自発的な行為、自発的な状態変化を表わすことができるものなるのに対し、他動詞文は目的語に対する直接的な働きかけを表し、補文の主語の自発性は問題にならない、としている。

紙谷(2001)は使役文においてヲ格のYには意志と関わらない動作を使うことができると述べ、本来Yの意志的な動作であっても、それを他者の意志によるものと表わすにはヲ格が使われるとしている。また非情物のヲ格を使った使役文も可能であり、対応する他動詞をもたない自動詞はセル形によって他動詞になる、と述べている。

加藤(2002)は使役文を「に格」をとる間接使役と「を格」をとる直接使役にわけ、直接使役は被使役者の意図的な行為を必要としないと述べている。

早津(2006)は「Y」が物や事であるときには、「X」が「Y」に積極的な働きかけを行って状態変化を惹き起こしたり、消極的に「Y」の状態変化を放置したりという他動的な使役となると

述べている。

これらの研究は他動詞的な「させる」文があるということを述べているが、それがどの程度重要であるかについては述べていない。また、それを使って学習者が文を作れるような情報としてはまだ十分とは言えない。

江田（2008b）は会話と小説・科学的な入門書での「させる」文について調査をし、以下のような結果を発表し、他動詞的な用法の重要性を述べた。

- [1] 会話では「させる」文はあまり使われないが、小説、人文科学入門書、自然科学入門書では多い。
- [2] X・Yの有情無情を調べた結果、無情物が関わる「させる」文が多く使われていることが分かった。
- [3] 会話・小説・人文科学入門書では有情+有情の「させる」文が多い。それに対し、自然科学入門書では有情+無情、無情+無情の「させる」文が多い。
- [4] いわゆる使役・許可放任・心理的变化の引き起こし・他動詞的用法に分類すると、男性の会話では許可放任の用法が多く、社会科学入門書・自然科学入門書では他動詞的用法が多いのが特徴であった。

表1 X・Yの有情無情

区分	X	Y
有情	607	447
無情	200	360

表2 8種のコーパスでの使役の用法

用法	男性会話		女性会話		小説1		小説2		新書		人文科学		社会科学		自然科学	
使役	13	27.7%	25	65.8%	44	30.1%	52	38.8%	23	23.5%	68	48.2%	24	34.3%	24	17.6%
許可放任	26	55.3%	10	26.3%	20	13.7%	28	20.9%	4	4.1%	8	5.7%	2	2.9%	3	2.2%
心理的变化	1	2.2%	0	0.0%	26	17.8%	16	11.9%	10	10.2%	30	21.3%	4	5.7%	7	5.1%
他動詞的	6	12.8%	3	7.9%	55	37.7%	37	27.6%	61	62.2%	35	24.8%	40	57.1%	102	75.0%
合計	46	100%	38	100%	145	100%	133	100%	98	100%	141	100%	70	100%	136	100%

以上のように、テキストの種類によって「させる」文は使われ方が異なる。「させる」文の教育を考える場合は、会話と書き言葉では重点の置き方を変える必要がある。書き言葉では他動詞的な用法を無視することはできない。

### 3. 目的

他動詞的な「させる」文の意味、X・Y・動詞の性質などを明らかにし、中級以降、学習者がレポートや論文を書く際にこの形が使えるようにする方法を考える。

### 4. 調査の方法と資料

江田（2008b）では会話・小説・科学的な入門書8種類160万字のコーパスを用いて調査したが、会話が社会人の会話だけであったため、本稿では学生の会話コーパスを一つ増やし、9種類180万字のコーパスでの資料をもとにする。

今回用いた資料は以下のとおりである。

- 1) 男性会話コーパス…『男性のこぼし・職場編』を使用。『男性のこぼし・職場編』は20代から50代までの男性の協力者と周囲の人の職場でのフォーマルな会話とインフォーマルな会話を録音したものである。協力者は男性だが、会話の相手は男性も女性もいる。総データ量は約12時間であるが、その発話、場面、協力者コード等からなるデータベースから発話のみをとり、先頭から20万字分を採用した。通常、話し言葉コーパスは発話時間で量を示すが、今回は字数で計算した。それは、書き言葉と共通の基準で比較したかったためである。11,099レコード（行）中8,000行までのデータを採用したことになる。本稿では「男性会話」と略す。
- 2) 女性会話コーパス…『女性のこぼし・職場編』の発話部分20万7千字中、他のコーパスと字数をそろえやすくするため端数を削り、先頭から20万字採用。女性の会話の総時間数は約9時間12分、文は11,421レコード（行）とのことである。このうち11,145レコード（行）を採用した。本稿では「女性会話」と略す。

このコーパスを基本として他のコーパスの量をそろえた。

- 3) 学生会話コーパス…筑波大学の砂川研究室で作成された学生の会話コーパスを使わせていただいた。本稿では「学生会話」と呼ぶ。

このコーパスは筑波大学の学生に周囲の人との自由会話やストーリーテリング、テーマ会話などをしてもらい、それを録音し、文字起こししたものである。159の会話が記録されているが、そのうち、上下関係がない親しい関係の自由会話で、留学生が含まれていないものを選び<sup>2)</sup>、まとめて一つの会話コーパスとした。こうして構成したコーパスの総量は文字数で23万7000字であった。そのうち20万字を採用した。

上下関係のない、遠慮のない状況、人間関係にあまり配慮しなくていい関係で「させる」表現がどのように使われているか見たいと考えた。

- 4) 小説コーパス1…『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』から、筆者の性別、執筆年代、取り上げている話題などに偏りがないように配慮し、1960年代以降の作品から5作品を選択した。各小説から約4万字をとり、計約20万字のコーパスを作成した。
- 5) 小説コーパス2…『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』の中に入っている新しい作品ということで1970年代以降の作品4点を選び、各5万字を採用した。
- 6) 新書コーパス…『CASTL/J』所収の新書から、理系2冊、文系2冊より20万字を選択した。
- 7) 人文科学入門書…『CASTL/J』所収の新書から、民族学・歴史学・日本語学・コミュニケーションの作品を各5万字採用した。
- 8) 社会科学入門書…『CASTL/J』所収の新書から経済学・法学・社会学・地理学の作品を各5万字採用した。
- 9) 自然科学入門書…『CASTL/J』所収の新書から物理学・化学・生物学・心理学の作品を各5万字採用した。

それぞれの作品名は巻末に記した。

検索には『KWIC Finder Ver.3.21a』を用いた。

以上のコーパスを用いて「かせ・させ・たせ・なせ・ばせ」「かさ・たさ・なさ・ばし」などで検索し、不要なものを手作業で削除する方法で調査した。「(s)aseru」だけでなく「(s)asu」も採

取した。

資料として出てきたもののうち、「(s)ase」「(s)as」という接辞を取り外して元の動詞が復元できるものを「させる」として採用した。たとえば「顔をそらす」などは「顔がそる」などの動詞が現代語では考えられないので慣用表現とし、「させる」文として採用しなかった。「合わせる」「知らせる」など辞書<sup>3)</sup>に他動詞として載っている語も「させる」文として採用しなかった。

## 5. 調査結果

今回の9種類のコーパスから得られた「させる」文は827例あった。

図1に見られるように、会話は小説・科学的入門書と比べて明らかに使用頻度が低い。人間関係で比較的遠慮のないはずの学生会話が社会人の会話よりさらに「させる」文の使用例が少ないことが注目される。

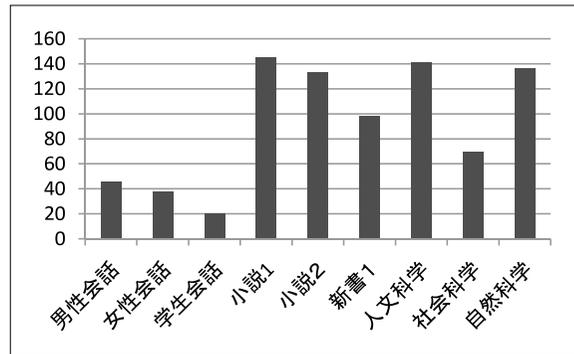


図1 9種のコーパスでの「させる」文

今回得られた「させる」文のうち、Yが無情のもの301例を他動詞的用法として、それについて分析した。他動詞的用法の文は「させる」文全体の36.3%にあたる。無視できない量であることがわかる。

## 6. 他動詞的用法の文

### 6.1 他動詞的用法の分類

他動詞的用法の意味を大まかに分類する。

#### (A) 働きかけ

(1) 沖縄には、洗骨の風習がいまものこっている。

それは遺体を数ヵ月から一年放置し、水分は「シルヒラシ」(汁乾し)とって乾燥させ、屍肉はことごとく脱落させ、白骨化させる。(人文科学)

(2) シリカゲルはシリカ(ケイ酸)のゲルという意味である。乾燥させたときに水蒸気が出るため、多孔質のかたまりになる。その穴に水蒸気を吸着させるので、乾燥剤としてはたらくのである。(自然科学)

Xは(1)では「沖縄の人々」であろうから有情者、(2)は物であるが、Yに対して働きかけており、他動詞と同様の働きをしている。自他対応のない動詞では自動詞として使われる語を他動詞的に用いる場合は「させる」形にすると寺村(1982)紙谷(2001)などが述べているが、その形と言える。

#### (B) 原因

(3) 日本のは発展は、若年労働力を都市へ集中させ、その結果、住環境をより悪化させたが、(社会科学)

(4) 寝室内の空気汚染が、陰イオンを減少させ、その結果として、ストレスや不眠の原因となる、という考えがある。(自然科学)

(3) では「日本の発展によって若年労働力が都市へ集中し、住環境が悪化した」、(4) では「空気汚染のために陰イオンが減少した」と読める。このような例を「原因」とまとめた。

金 (2000) は状態性述語を使った文での「する／させる」選択の要因として

Xが動作主 Xの関与度高い→他動詞文

Xが原因 Xの関与度低い→使役文

になるとし、Xが原因を表す場合は使役になりやすいと述べた。この金 (2000) のとりあげている使役文が本稿の他動詞的「させる」文にあたる。

今回得られた文では、状態性述語が使われた文も多少あったが、多くは動態性述語であった。本稿では原因と分類できるかどうかを、Xを「で」「によって」に置き換えて文が成立するかというテストによって行った。

(5) a しかし、富農を成立させるのは奉公人の存在である。(人文科学)

(5) b 奉公人の存在によって富農が成立する。

(6) a 企業の競争力上昇が大幅国際収支の黒字を定着させ、深刻な貿易摩擦に発展しつつあった。(社会科学)

(6) b 企業の競争力上昇で黒字が定着した。

上の例はbのように「で」による置き換えが可能である。しかし、(5) のように原因としか読めない例はあまり多くなく、(6) のように、原因とも読めるが働きかけも含んでいる例が多かった。

上の(1)(2)の「働きかけ」とした例のXを「で・によって」に置き換えてみると、(1) は人が主体なので原因とはならない。(2) は以下のように「で」による置き換えが可能のように見える。

(2) b シリカゲルでその穴に水蒸気を吸着する

しかし、(2) の文ではシリカゲルが作用を行う主体として働いているのに対し、(2) b では人がシリカゲルを使って何かの穴に水蒸気を吸着すると述べていることになり、意味が異なるので、こうした例は原因とは認めなかった。

Xに無情物が用いられ、文が原因とならない例としては後出の例文(13)(21)など数多く見られる。

### (C) 関係・特性を表すもの

Aの「働きかけ」はXがYに影響・作用を及ぼす意味であるが、そうした作用の意味を持たない例が見られたので、それらを関係・特性を表すものとまとめた。

(7) いつも地図と現地を対応させるように努力しなければならない、ということになります。(新書)

(8) 戦後日本企業は企業内教育をすこぶる重視し(中略)社外講習会への参加など、OJTにオフJTをリンクさせているのも大きな特徴である。(社会科学)

(7) は地図と現地を「関係させる」という意味で、(8) はOJTとオフJTを「関係づけて」おり、これらの例はXのYに対する働きかけの意味がかなり弱い。Xは原因にもなっていない。X

とYの関係を語っている。時間的な変化と関わらない点も特色の一つとしてあげられよう。他の例では「調和させる・潜在させる・優先させる・両立させる」などの表現が使われていた。

(D) Xが全体を示しYがその身体部分・所有物となる描写の文

(9) 男は切々と声をつまらせわめきたてる。(小説1)

(10) ビザンチン帝国の国旗をはためかせて近づくと (小説1)

(9) では「男が声をつまらせる」、(10) では「軍艦が帝国の旗をはためかせる」のように、Xが全体をYがその部分や所有物を表し、「させる」表現でXについて描写している。ほかに「目を輝かせる」「顔をこわばらせる」「口をとがらせる」などの例が見られた。

## 6.2 4つの用法の出現状況

### 6.2.1 「働きかけ」が基本的

以上の用法の出現状況を表3に示した。「働きかけ」「原因」「関係」などは割り切れるものではなく、働きかけのであり同時に原因とも読める例などもかなりある。

(11) この薬剤は、精神遅滞児にみられるひくいレム睡眠レベルを回復させる作用がある、という。(自然科学 働きかけ・原因)

(12) しかしその後(中略)対社会規範的なもの(中略)などをうたい込む必要に迫られてきており、これらとビジネスの実践規範とを、どのように調和させて企業の新しいアイデンティティを確立するかを模索しているのである。(社会科学 関係・働きかけ)

(11) は「働きかけ」と「原因」が重なった例、(12) は「関係」でもあり「働きかけ」とも読める例である。

表3に見られるように、他動詞的な用法の多くは「働きかけ」の意味で使われていることがわかる。「働きかけ」「働きかけ・原因」を合わせると215例となり302例の2/3以上がこの用法である。「させる」文の他動詞的な用法の基本的な意味は他動詞であるといえるであろう。

表3 用法分類

用法	出現数
働きかけ	177
働きかけ・原因	38
原因	6
関係	31
関係・働きかけ	9
全体部分	40
合計	301

### 6.2.2 テキストによる4用法の出現状況

表4は3種の会話コーパス、2つの小説コーパス、4種の科学的入門書コーパスをそれぞれまとめ、その中での他動詞的「させる」文の使われ方の違いを見たものである。

会話はほとんどが働きかけであり、小説では全体一部分関係の描写の文が多い。科学的入門

表4 テキストの種類と用法の出現状態

	会話		小説		科学的入門書	
	出現数	割合	出現数	割合	出現数	割合
働きかけ	14	93.3%	14	27.5%	149	63.4%
原因	0	0.0%	4	7.8%	40	17.0%
関係	1	6.7%	3	5.9%	36	15.3%
全体部分	0	0.0%	30	58.8%	10	4.3%
	15	100.0%	51	100.0%	235	100.0%

書では働きかけ・原因・関係などの用法がある程度あり、他動詞的な用法は数の上でも用法の多様

性の上でもこうした書き言葉で豊かに使われるものであることがわかる。

Dの「全体一部分関係の描写」の文は小説に多いが他の文脈では頻度は高くない。学習者にとってこの用法はどの程度必要性があるのか調査したいところである。

### 6.2.3 事柄の一般性・個別性

次に、述べる事柄が一般的なことであるか個別的事柄であるかについて見てみよう。

一般的な捉え方をしているか個別の捉え方をしているかは、事象として例をあげているか、体制の構造や物の性質として述べているかによって区分した。

(13) 神経伝達物質は、シナプス間のごくわずかなすきまを通過して、となりの神経細胞の膜を電氣的に興奮させる。(自然科学 一般的)

(14) コロンミュラーらは、二頭のネコの頸動脈を交叉させて、たがいに血流交換がおこるようにした。(自然科学 個別的)

(13)は神経伝達物質の作用を述べている文なので、一般的な事柄に分類した。一方(14)はある実験について説明している例であるが、このような例を個別的事柄とした。

表5のように、今回の調査では一般的な事柄として述べられている例が多かった。

次に会話・小説・科学的入門書での一般的な事柄、個別的事柄の述べ方を見てみよう。

会話は今回は例の数が少ないので明確には言えないが、やや個別的事柄を取り上げて述べているようである。はっきりした傾向はもう少し例の数を増やして考えたい。小説は個別的事柄が非常に多い。科学的入門書は80%以上が一般的な述べ方であるというように、小説と科学的入門書では述べ方の傾向はかなり違う。

表6 テキストの種類と事柄の一般性個別性

	会話		小説		科学的入門書	
	出現数	割合	出現数	割合	出現数	割合
一般的な事柄	6	40.0%	1	2.0%	196	83.4%
個別的事柄	9	60.0%	50	98.0%	39	16.6%
合計	15	100.0%	51	100.0%	235	100.0%

(15) (私たちは) そろそろ (話を) 終わらせよう。(学生会話 個別)

(16) 船上の射手たちは、それに向って矢を雨と降らせてくる。(小説1 個別)

(17) 他方において、テレビ技術を基本的に完成させていた高柳賢次郎博士や、(社会科学 個別)

(18) この春闘方式は(中略)企業別の枠を越えた要求を掲げ、これを幅広く実現させていくという点で有効であり、(社会科学 一般)

(15)は話し手が今話しているこの話をそろそろ終わりにしようと言っているところで、個別の人が個別の今話について述べている。(16)は小説での描写である。小説は物語であるため、個別の対象を選び、それについて描写していくという文章なのでこの結果がでたのであろう。

(17)は科学的入門書で特定の人や特定の事柄について述べている例である。しかし、科学的入

門書に多いのは(18)のようにある集団などの傾向を述べる表現である。

### 6.3 他動詞的な4つの用法とX・Y・動詞の性質

#### 6.3.1 Xの性質

次にXにはどのような語が使われるか見てみよう。

まずXを有情・無情で分類した。機械的判断をして物事・集団などを無情とした分類と、物であっても人の存在が背後に見える名詞についてその意志を重視し有情扱いにした分類の2種をあげた。

二つの分類方法は次のような考え方に対応している。学習者がXに無情物が使えるということを確認できるようにするためには無情物は無情物として示す方がよいという考え方もある。一方、無情のものが文脈によって有情物と同じようにふるまうものがあるが、無情物をどこまで有情扱いできるかの線引きは難しい。無情物の意志性を比較的重視した分類法をすると、どの程度無情物が有情扱いできるかを見ることができる。このように無情物の意志を重視したのが表8である。

機械的判断では無情物主体の文が約半数となったのに対し、意志重視の読み方をすると2/3が有情扱いとなる。301例中30例に有情と読める無情物が使われていたことになる。

表7 Xの性質機械的判断

分類	出現数
有情	161
無情	140
合計	301

表8 Xの性質意志重視

分類	出現数
有情	197
無情	104
合計	301

有情物としては次のような名詞が表れた。

特定の人・(一般的な)人・科学者・古代人・観客など

意志重視でも機械的分類でも無情とした名詞には以下のようなものがあつた。

カテゴリー名詞<sup>4)</sup> 装置・遺伝子・伝達物質・ストレス・突然変異など

人の活動を表すもの 論争・努力・競争力・変化・発展・歴史など

意志重視の場合、有情扱いにした名詞には以下のようなものを入れた。

人が構成する集団 国家・会社・企業・産業など

物質だが意志があるように読めるもの 脳・神経システム・生体など

例文をあげる。

- (19) 新緑のころ摘まれた茶の若葉を蒸気で蒸し、やわらかくなったものを手や機械で縫り、乾燥させると、緑茶ができる。(自然科学 X=人 有情)
- (20) 寝相によっては、歯ぎしりのため、歯が摩耗してしまうことがある。これをふせぐには、あおむけに寝ることがこのましいのだが、このさい枕をもう一つ両膝の下に置いて、脚を楽にさせるとよいらしい。(自然科学 X=人 有情)
- (21) 有害な微粒子を取り除き新鮮な空気を発生させる装置が開発されている。(自然科学 X=装置 無情)
- (22) 天下をわかせた論争はダーウィン側の勝利に終わった。(自然科学 X=論争 無情)
- (23) 社会矛盾に国家が介入して国民の生存を全うさせ、生活を安定させなくてはならないからである。(社会科学 X=国家 無情/有情)

(24) 脳が身体の現状に対応して、眠気を増減させていることを、わたしたちはよく知っている。(自然科学 X=脳 無情/有情)

(19) (20) ではXは文中に現われていないが、一般的な「人」であろう。これらの例のように、Xの存在を意識しなくても成立するような「させる」文がいくつか見られた。

(21) (22) は「装置が新鮮な空気を発生させる」、「論争が天下をわかせる」と無情物が働きかけている。

(23) (24) のXは無情物である「国家」「脳」であるが、これらの文での「国家」や「脳」は意志をもって働きかけているように読める。こういった文は、中上級の学習のどこかで触れておけば学習者には理解しやすいのではないかと思われる。

「働きかけ」「原因・(働きかけ)」「関係・(働きかけ)」「全体部分」のそれぞれの用法でのXの有情・無情を見てみよう。表9は機械的区分、表10は意志重視の分類である。「働きかけ」「全体一部分関係の描写」ではX有情が多く、「原因」のXは無情であった。「関係」では機械的区分と意志性重視とで結果が異なっていたが、例の数が少ないので明確なことは言えない。

「原因」が他の3者と異なりXは無情物が使われるが、「働きかけ」「全体一部分」では基本的に有情物が主体となる文が作られていると言えよう。

### 6.3.2 Yの性質

今回の例文ではYはすべて無情物である。本稿では、Yの意志性が読み取れないものを他動詞的用法とする、と定義して文を採取したためである。

6.2.3で、文全体で述べている事柄が個別的か一般的かを見たが、Yについても同様に調べてみた。

表11のように一般的な名詞が多かった。文全体が個別的な事象か一般的な事柄を述べているかを見た表5に比べて、表11の方がやや

表9 Xの有情・無情と意味用法（機械的区分）

分類	働きかけ	原因・(働きかけ)	関係・(働きかけ)	全体部分
有情	106 59.9%	0 0%	20 50%	35 85.3%
無情	71 40.1%	44 100%	20 50%	5 14.7%
合計	177 100%	44 100%	40 100%	40 100%

表10 Xの有情・無情と意味用法（意志重視の分類）

分類	働きかけ	原因・(働きかけ)	関係・(働きかけ)	全体部分
有情	133 75.1%	0 0%	29 72.5%	35 85.3%
無情	44 24.9%	44 100%	11 27.5%	5 14.7%
合計	177 100%	44 100%	40 100%	40 100%

表11 Y個別名詞か一般名詞か

Y	出現数	割合
一般的名詞	223	74.1%
個別的名詞	78	25.9%
合計	301	100.0%

表12 テキストの種類とYの性質

分類	会話		小説		科学的入門書	
	出現数	割合	出現数	割合	出現数	割合
一般的名詞	7	46.7%	1	2.0%	215	91.5%
個別的名詞	8	53.3%	50	98.0%	20	8.5%
合計	15	100.0%	51	100.0%	235	100.0%

一般的なYが多い。それは(26)のように、述べている事柄は個別的なことであってもYに「水」のような一般的な名詞が用いられる例があったためである。

表12は会話・小説・科学的入門書でのYの性質を見たものである。会話は例の数が少ないので明確なことは言えない。小説は個別的なYが多く、科学的入門書は逆に一般的な名詞が大半である。

小説でのYには以下のようなものが使われている。

体・拳・唾液・目・口・ためらい・など身体部分や感情  
水・エレベーター・部屋・先端・矢など

科学的入門書でのYには以下のような名詞が用いられている。

カテゴリー名詞 伝達物質・獲得形質・エネルギーなど  
抽象名詞 論理・文化・競争力・動き・内容・相違点・行動様式など

Yについても小説ではやはり個別的な事柄が多い。

似たような語を使っての小説と科学的入門書での例文を並べてみた。

(25) おそらく、桶を埋めた位置や、蓋の隙間の具合などが、偶然、吸い上げた水を蒸発させずに、ちょうど桶の中に流しこむような関係にあったのだろう。(小説 X男=個別 Y吸い上げた水=個別)

(26) その化学工場では、アセチレンに水を付加させてアセトアルデヒドを作っていた。(自然科学 Xその工場=個別 Y水=一般)

(27) 白いテーブル・クロスに、誰かが滴らせてしまったらしいシチューが一滴、ポツリとついていた。(小説 X誰か=個別 Yシチュー=個別)

(28) 熱いものが咽頭を通ると、迷走神経は驚いて、一時は食道の入口を閉じるが、徐々に通過させる。(新書 X迷走神経=一般 Y熱いもの=一般)

(25)(26)は同じ「水」という語をYに使った文である。(25)では砂の中に桶を埋めたところ、その中に水がたまったということを述べている。(26)では工場でアセチレンに水を付加させてアセトアルデヒドを作るということを述べている。(25)では「吸い上げた水」と描写していることもあり、個別的なその場面で問題にする水と判断し、個別に分類した。一方(26)では工場は「その工場」と述べていることから個別的な工場だが、生産は一般的なことであり、この「水」は一般的なものとした。

(27)(28)は食べ物のお話である。(27)は「誰かが滴らせたシチュー」なので個別に、(28)は神経と食道のお話で一般的に食べ物がどのように食道を通過するかということなので、この「熱い食べ物」は一般とした。

小説と科学的入門書では述べ方が少々異なり、科学的入門書では一般的な事柄をYに用いると文が安定しやすいと言えそうである。

小説のYの名詞は個別的か一般的か判断しにくいものもある。

この点が他動詞的「させる」文のYの特色と言えるかとも思われる。つまり、一般的なものとして扱える名詞をYに使うと文が安定する傾向があるのではないだろうか。

## 6.3.3 動詞

楊（1985）は寺村（1982）を用いて自動詞他動詞と使役の関係について以下のようにまとめた。

対立する他動詞を持たない自動詞に「させる」がつく場合

Yが有情ならば使役 彼を行かせる

Yが非情ならば他動詞 目を光らせる

対立する他動詞がある自動詞に「させる」がつく場合

Yが有情ならば使役 XがYを降りさせる

Yが有情でもYの意志を考慮しないならば他動詞

XがYを降ろす

Yが非情ならば「させる」をつけられるものとつけられないものがある

自動詞+させるが可能なもの 水を流れさせる

自動詞+させるが不可能なもの 机を壊れさせる

本稿で取り上げている問題はYが無情（楊の用語では非情）の「させる」文である。

本稿で得られた例文について動詞の自他を調べてみた。

和語動詞については『新明解国語辞典』を用いた。漢語動詞については『新明解国語辞典』には記載されていないので『学研 国語大辞典』を用いた<sup>5)</sup>。

自動詞が大半を占めている。

次に自他の対応がある動詞はどのくらい含まれているかを調べた。漢語動詞の自他同形の語は「有」とした。自他の対応のある動詞は少数で、大半が自他対応のない動詞であった。

次に動詞の語種を調べてみた。表16のように漢語動詞が全体の約2/3、和語動詞が1/3の割合であった。

以上をまとめると、漢語動詞・和語動詞は今回の調査では2対1の割合で使われていたが、80%は自動詞で、その大半は自他対応がないものであった。

次に影山（1993）の他動詞・非能格自動詞・非対格自動詞の考えを用いて動詞を分類した。

他動詞

非能格自動詞

意図的・意志的な行為を表す動詞

走る・あばれるなど

非対格自動詞

非意図的、受動的に現実に関わることを表す動詞

折れる・落ちるなど

漢語動詞は自他同型のものもあり、それらは自動詞でも他動詞でもあるが、一応他動詞に分類した。和語動詞・漢

表13 動詞の自他

動詞の自他	出現数	割合
自動詞	244	81.1%
自他動詞	12	4.0%
他動詞	45	15.0%
合計	301	100.0%

表14 自他の対応

	数	割合
有	33	11.0%
無	268	89.0%
合計	301	100.0%

表15 動詞の語種

語種	数	割合
和語	102	33.9%
漢語+する	197	65.4%
外来語+する	2	0.7%
合計	301	100.0%

表16 動詞の分類

分類	数	割合
他動詞	57	18.9%
非能格自動詞	16	5.3%
非対格自動詞	228	75.7%
合計	301	100.0%

語動詞を問わず、多くの非対格自動詞と多少の他動詞によって他動詞的「させる」文が構成されており、非能格自動詞が少ないことがわかる。

例を挙げる。

他動詞

- (29) これを焼いて結晶水を過半失わせたものを、焼き石膏という。(自然科学)  
(30) 昼のストレスが夜間に潰瘍をつくらせる、という可能性があらためて、専門家のあいだで論議されている。(自然科学)

非能格自動詞

- (31) そちらの方向に超高速ロケットを走らせ、仮にその速さを光速に近くしたらどうなるか。(自然科学)  
(32) さっそく、ダーウィン進化論から話をスタートさせよう。(自然科学)

非対格自動詞

- (33) ラベンダーの香りには、気分をおちつかせるはたらきがあり、枕もとにおくと眠りをさそう、と考えられている。(自然科学)  
(34) しかし、氷をいくら乾燥させてもドライアイスはできない。(自然科学)

## 7 考察

ここで動詞についてまとめておこう。他動詞に「させる」をつければ通常の使役文になり、他動詞的「させる」文にはならない。対立する他動詞を持つ自動詞には「させる」をつけない。その役割は他動詞が担うためである(寺村1982)。自動詞には非能格自動詞と非対格自動詞がある。非能格自動詞、つまり人の意志の動作を表す動詞に「させる」をつければ、人を対象とする通常の使役文になる。対立する他動詞を持たない非対格自動詞に「させる」をつければ他動詞的「させる」文ができる。以下に図で示す。

他動詞 + 「させる」 → 使役 子供に本を読ませる

対立する他動詞をもつ自動詞(非対格自動詞) + 「させる」 → ×

かわりに他動詞を使う

家が建つ

×家を建たせる

家を建てる

対立する他動詞を持たない自動詞

非能格自動詞 + 「させる」 → 使役

子供を外で遊ばせる

非対格自動詞 + 「させる」 → 他動詞的「させる」

花を咲かせる

非対格自動詞は意志の行動を表さない自動詞だが、対立する他動詞をもつもの(戸があく(自)―戸をあける(他))と対立する他動詞を持たないものがあり、他動詞的「させる」文が作れるのは他動詞を持たない非対格自動詞である。

では、非対格自動詞を使えば他動詞的「させる」文は無条件に作れるのであろうか。

- (35) a 結婚して1か月、2人の生活も落ち着いた。(作例)

b 結婚後の時間が2人の生活を落ち着かせた。

(36) a 彼女はセンスがいいから、彼女が着るとなんでもない服もどことなく引き立つ。  
(作例)

b 彼女のセンスが服を引き立たせる。

(35) (36) とともに非対格自動詞を使った文である。どちらもbは翻訳調で、小説の中なら使うかもしれないが、学習者がこのような文を作った場合は「させる」をはずして表現するように、と指導するのではないだろうか。

この許容度とYの性質が関係するであろう。必ずとは言えないが、Yに一般的な名詞を使った文は許容度が高くなる。

(37) 女性らしさを引き立たせる柔らかいシルエットの服 (作例)

のように、個別の「彼女の服」ではなく、柔らかい感じの服は一般的に女性らしさを引き立たせる、という表現にすると許容できる文になる。6・3・2でとりあげた、Yに一般的な名詞がよく使われる傾向があるということと関係するであろう。

次に漢語動詞の問題を考えてみよう。他動詞的「させる」文がよく出現する新書レベルの文章では漢語動詞がよく用いられる。しかし、漢語動詞の自他は国語辞典に表示されていないことが多い。手元にある辞典で漢語動詞の自他が表示されているかどうかを調べたところ次のような結果になった。

漢語動詞の自他を表示しない国語辞典

『新明解国語辞典』『広辞苑』『小学館国語大辞典』『言泉』  
『大辞林』『大辞泉』

漢語動詞の自他を表示する国語辞典

『学研 国語大辞典』

学習者は漢語動詞の自他を見分けるところで困難に遭遇する。

多くの国語辞典で漢語動詞の自他を表示しない理由は、たとえば『新明解国語辞典』では「動詞は活用の種類と自他の区別を示した。ただし、動詞の自他に就いては疑義も多いので、サ変動詞については(中略)一切しるさなかつた」<sup>6)</sup>と述べている。自他が明確でない動詞もあるということである。

非能格自動詞・非対格自動詞という区分は非常に便利な区分であるが、学習者にとって、動詞、特に漢語動詞を非能格であるか非対格であるか、見分けることは簡単な作業であろうか。これは学習者に接触して調べてみたいと考える。

今回使われていた動詞から非対格自動詞を一部挙げると次のような語であった。

和語	落ち着く	衰える	したたる	しみこむ	つのる	にごる		
	はっきりする	ひきたつ	みなぎる	(世間が) わく				
漢語	悪化	安定	遺伝	一致	加速	開花	乾燥	完成
	減少	逆転	興奮	荒廃	充実	出現	充滿	循環

(動詞の「する」を省いて表示した)

これらの語はいわゆる初級語彙ではない語が多く、共起する語に制限のある語がみられる。

(38) 変わる ○組織・○社会・○予定・○顔色

(39) 変化する ○組織・○社会・?予定・?顔色

(40) 予定を {a 変える / b × 変化させる}

(41) 組織を {a 変化させる / b 変える / c × 変わらせる}

(38) に見られるように、和語動詞「変わる」は比較的いろいろな語と共起できるが、よく似た意味の漢語動詞「変化する」は (39) のようにとれる語に制限がある。そこで (40) a のように共起できる語とともに使う場合は問題がないが、(40) b のようにもともと共起できない語とともに使う場合は認められない。共起できる語との関係で問題が起こる可能性がある。(41) に対応する他動詞のある自動詞の「させる」形は使えないという例をもう一度出した。

## 8 まとめと今後の課題

以上、会話・小説・科学的入門書の他動詞的「させる」文を構成する X・Y・動詞について見てきた。これまででわかったことをまとめる。

「させる」文の他動詞的用法は、基本的に社会科学・自然科学などの科学的な書き言葉で用いられる形と言えるだろう。大学で学ぶ学習者にとってはぜひ習得してもらいたい形と言える。この形には「働きかけ」「原因」「関係」「全体一部分関係の描写」という4つの使い方があり、その中でも基本的な意味は有情者を X とする「働きかけ」である。「原因」の用法は使用例も多くな、中心的な用法とは言えない。

小説と科学的入門書では他動詞の用法の使われ方が異なり、小説では「全体一部分関係の描写」がよく用いられ、科学的入門書では「働きかけ」が多いが、「原因」「関係」の用法でも使われていた。

事柄の述べ方は、小説では個別的な事象を扱うことが多いが、科学的入門書では体制の構造や物の性質などの一般的な事柄を述べる。

文を構成する要素では、X には、人あるいは人の集団・社会体制などや意志を持って動くように見える物が来ることが多い。Y はカテゴリー名詞や抽象名詞などが使われることが多い。

動詞は自他対応のない自動詞、それも非対格自動詞が用いられることが多い。

科学的入門書では漢語動詞がよく使われる。しかし、一般的に国語辞典では漢語動詞の自他を記載しないことが多く、学習者にとっては動詞を見ても自他の判別が難しいであろう。また中級語彙には共起する語に制限のある動詞が見られるので、この点も難しいであろう。

学習者は非対格自動詞の概念を理解し、それらと共起する語を学習する必要がある。

実際の学習者への教育には方法を工夫しなければならないと思われる。学習者にとってあまりにも複雑すぎない方法を考え、実際につかってもらう実験をするのが次の課題であろう。

### 注

- 1) 森 (2004) では「使役」ではなく「サセル」という用語を使っている。本稿でもこれにならった。
- 2) 留学生の発話では「させる」文の他動詞的用法はそれほどみられないだろうと判断したためである。
- 3) 『新明解国語辞典』を用いた。
- 4) カテゴリー名詞という語は、具体的な物ではなく、類として物を扱っている名詞という意味で用いている。

- 5) 辞典が表示を避けるほど難しい問題であるので、一応の参考と理解していただきたい。  
6) 『新明解国語辞典』 P6

#### 採用した作品

- ・小説1 安部公房(1961)『砂の女』、沢木耕太郎(1994)『一瞬の夏』、塩野七生(1991)『コンスタンティノープルの陥落』、三浦綾子(1973)『塩狩峠』、村上春樹(1988)『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』。
- ・小説2 椎名誠(1987)『新橋烏森口』、筒井康隆(1981)『エディプスの恋人』、曾野綾子(1978)『太郎物語』、宮本輝(1985)『錦繡』。
- ・新書1 文科系:中根千枝(1967)『タテ社会の人間関係』、中川剛(1989)『日本人の法感覚』、理系:吉岡郁夫(1986)『人体の不思議』、千葉康則(1991)『記憶の脳生理学』
- ・人文科学系入門書 井上忠司(1982)『まなごしの人間関係』、金田一春彦(1975)『日本人の言語表現』、高尾一彦(1976)『近世の日本』、吉野裕子(1982)『日本人の死生観』
- ・社会科学系入門書 織田武雄(1974)『地図の歴史—日本編』、下川浩一(1990)『日本の企業発展史』、中川剛(1985)『憲法を読む』、吉田寿三郎(1981)『高齢化社会』
- ・自然科学入門書 井上昌次郎(1988)『睡眠の不思議』、都筑卓司(1991)『時間の不思議』、中原秀臣(1991)『進化論が変わる』、米山正信(1991)『化学とんち問答』

#### 【参考文献】

- 青木玲子(1977)「使役—自動詞・他動詞との関わりにおいて—」須賀一好編『動詞の自他』ひつじ書房
- 井上和子(1976)『変形文法と日本語・下』大修館
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 加藤幸子(2002)「日本語の形態的使役をめぐって」『言語科学論集』
- 紙谷栄治(2001)「現代日本語の他動詞と動詞の使役形について」『関西大学文学論集』51-2
- 金 熹成(2000)「状態述語文の他動化と使役化—意味的特徴を中心に—」草薙裕編『現代日本語の語彙・文法』くろしお出版
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- 江田すみれ・小西円(2008a)「3種類のコーパスを用いた3級4級文法項目の使用頻度調査とその考察」『日本女子大学紀要 文学部』
- 江田すみれ(2008b)「使役表現の文脈の違いによる使用状況について—8種のコーパスによる調査結果から—」『日本語教育学会春季大会予稿集』
- 江田すみれ(2008c)「使役の用法の文脈による違い—3種のコーパスでの文法項目の調査から見たこと—」『台湾日本語文学報』
- 定延利之(1991)「SASEと間接性」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
- 鈴木睦(1997)「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」田窪行則編『視点と言語行動』くろしお出版
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版
- 仁田義雄(2000)『日本語の文法 1 文の骨格』岩波書店
- 早津恵美子(2006)「使役表現」尾上圭介編『朝倉日本語講座 文法II』朝倉書店
- 森篤嗣(2004)「形容詞連用形に後接するスルーサセルの置換について」『日本語教育』120号
- 楊 凱榮(1985)「「使役表現」について—中国語との対照を通じて—」『日本語学』44